

ワクチンの基礎知識

免疫がある場合とない場合の感染の違い

免疫がない場合



- 免疫がない状態で感染した場合、発症や重症化のリスクが高いうえに、他人に感染させやすい。

免疫がある場合(ワクチン接種*、自然感染などで免疫を獲得)

- *ワクチンは病原体や毒素を無毒化・弱毒化したものを接種することで、感染や発症をせずに免疫を獲得する。



ワクチンのメリット

- 人の免疫反応のしくみを活用して安全に免疫を獲得することができる。
- ワクチン接種により免疫を獲得すると、その病気に感染したり発症しにくくなる。たとえ発症しても重症化しにくい。

ワクチンのデメリット

- ワクチンに対する免疫の働きによる接種部位の腫れや発熱、発疹などの症状が現れることがある。症状は数日～1週間程度で治まる。
- 生ワクチンの場合、その病気のごく軽い症状が現れることがある。
- 重い副反応としてアナフィラキシー(強いアレルギー反応)があるが、迅速に対応すれば後遺障害を残すことはない。アナフィラキシーが発生した場合に備えて、接種後15～30分間は医療機関や接種会場で待機・観察が必要となる。

ワクチンの種類*

生ワクチン

病原性を弱めた病原体を接種して、必要な免疫を獲得する。
主なワクチン:MR(麻しん風しん混合)、水痘、おたふくかぜワクチンなど

不活化ワクチン、組換えタンパクワクチン

感染力をなくした病原体や病原体を構成するタンパク質を接種して、必要な免疫を獲得する。
主なワクチン:髄膜炎菌、HPV、B型肝炎、DPT(三種混合)、日本脳炎、インフルエンザ、新型コロナワクチン(武田社)など

mRNAワクチン

ウイルスを構成するタンパク質の遺伝情報を接種して、体内でウイルスのタンパク質を産生させることで、必要な免疫を獲得する。

主なワクチン:新型コロナワクチン(ファイザー社、モデルナ社)

*<https://www.cov19-vaccine.mhlw.go.jp/qa/0018.html>

新型コロナウイルス感染症



- 新型コロナウイルスによる感染症で、世界的なパンデミックとなった。国内では3200万人以上が感染し、6万8千人以上が亡くなっている。
(2023年1月31日現在)
- 若者の重症化率は低いが、長期にわたって疲労感・倦怠感、呼吸困難、筋力低下、集中力低下等の後遺症が残り、日常生活や学業に支障が出る場合もある。
- 変異株により感染力や重症度が異なるため、その時に流行している変異株に合わせた対応が求められる。



様々なデマや不正確な情報が多い。SNS上の投稿や個人の噂話は鵜呑みにしないで、科学的根拠に基づいた情報を見極めることが大切。



新型コロナワクチン(予防)

- ワクチンを接種すると、重症化予防が期待できる。
- オミクロン株対応ワクチンの3回接種が推奨される。
- 海外留学、海外渡航時はワクチン3回接種に加えて、現地の流行状況(流行している株の特徴を含む)を確認し、必要な対応を考慮する。
- インフルエンザ流行期には季節性インフルエンザワクチンの接種も推奨される。



基本的な感染対策の継続

- ① 手洗い／咳エチケット／人と接する場所・人の多い場所でのマスク着用
- ② 室内の換気
- ③ 体調がすぐれない場合、外出や人と会うことを控える

感染が疑われる場合の留意点

- 日々の健康観察を行い、発熱や咳などの症状がある場合は、集団で行動したり人と会うことを極力避け、医療機関を受診したり、自宅で療養する。
- 症状がある場合、薬局で市販されている検査キットで自己検査を行う。
- 発症2日前から発症後7～10日間程度は、人にうつす可能性があるといわれているので、自宅待機が解除されても、その期間はマスクを着用するなど感染対策を十分に行う。

※2023年1月現在の情報に基づいています。流行する株や感染状況によって取るべき行動は変わりますので、最新の情報に留意してください。

新型コロナワクチン Q&A

検索



<https://www.cov19-vaccine.mhlw.go.jp/qa/>